

翻訳について論じる前に確認しておきたいこと

前書き

今回は、「翻訳の際に要求されること」というテーマを取り上げたい。これはいわば文章作法であり、翻訳とは切り離して述べることも可能なことである。しかし、この問題は、これから翻訳について議論する際に理解の助けとなるものであり、また、翻訳の働きと非常に関係の深いものであると思うため、ここで取り上げることにした次第である。

今回ここで述べることは、すでに「東洋の翻訳論」で述べたことであり、新しいものではない。しかし、そこでは簡単に書きすぎたという問題があった。また、そこであげた用例は、不適切とまではいえないが、あまりしっくりしないものもあった。そこで、もう少し腰を落ち着けて書くことにした次第である。

本論

翻訳の際、訳文にはどのようなことが要求されるであろうか。今まで翻訳論を論じる者の間で言われてきたことを、とりあえず以下の4つにまとめることができると思う。

1. 文章（訳文）の自然さ。

ここで、自然さとは何かということが問題になるが、ここでは、「慣用にしがっていること、使用頻度が高いこと」と説明しておくことにする。例えば、「帽子を着る」ではなく「帽子をかぶる」の方が自然な表現である。小説のストーリーについても、ある程度慣用とか、きまりといったものがあると思う。例えば、登場人物の性格が途中で激変するという小説はきわめてまれであると思う。

2. 文章のわかりやすさ。

ここでも、わかるとはどういうことかという問題がある。頭では理解できないが、感覚的にわかるという場合もある。たとえば、赤い三角や黄色い四角の出してくる（と記憶しているが）北園克衛の詩などは、詩全体としての意味を考える必要はなく（そのような意味は本来存在しないらしい）、花咲く公園を散歩するときのように、それぞれの語のおりなす景色を味わえば（楽しめば）よいといわれている。また、スポーツの世界では体でしか理解できないことがあり、数学の世界では数学的にしか理解できないことがあるものと思う。

3. 文章が文学的（芸術的）であること。

すなわち、芸術性を備えていること。これは常に要求されるわけではないが、文学作品の翻訳では必ず要求される。いや、社会科学の文献や、一般の学術論文等でも、文学的表現は出てくるし、芸術性は言語にとって本質的なものではないかとさえ思われるほどである。文学性、芸術性とは何をさすのか、まだまだ未解明な部分が多い。

4. 文章が興味を引くのものであること。

面白さといってもよいであろう。「売れる」という言葉で表現することもできる。

なぜこのような項目を特に設けたかといえば、その第一の理由は、最近のスコポス理論からこのようなことが要求されると思われるからである。また、第二の理由は、とにかく売れなければ書店もやっつけられないし、また、多くの場合、翻訳という仕事も成立しなくなってしまうからである。

仕事も講演も講義も、必要とあれば、面白くなくとも参加する、あるいは実行するわけであるが、もし面白い話であれば、頭にも入りやすいし、また、仕事に興味湧けば、能率も上がる。また、出版社が売れない本を出してくれるのは、売れる本をかなり出版しているからにほかならない。「面白いかどうか」ということを、低次元の話題として取り扱うべきではないと、わたしは思う。

これらの要求は互いに競合する。（あるいは拮抗する、両立させにくい、時として両立させにくい等、いろいろな言い方が考えられるが、ここではこの原稿の性格上、「競合」という語を使うことにした。）すなわち、これらのうち、どれか一つを追求していくと、他のものが犠牲になっていく。確認のため、ここで一つ一つについて見てみることにする。4つのうちから2つずつの組み合わせは全部で6通りあることになるが、その一つ一つについて見てみる。このようなことをする理由は、それぞれの組み合わせにより状況は異なるし、また、ひょっとすると、「競合しない」という例が出てこないとも限らないからである。そのため、全部について確認しておきたい。

1. 自然さとわかりやすさは競合する。

複雑な戦闘の場面の描写について考えると、A軍の・・・が、B軍の・・・と戦い、そのとき、A軍

からB軍にねがえった・・・が、等々、いちいち説明をつけてくれるとありがたいが、一般には自然な文章で書かれているため、注意して読まないで頭の中が混乱してくる。また、コンピューターで複雑な操作をする場合、説明書でくどいほどの書き方をしてくれればありがたいのであるが、一般には自然な文章になっていて、わかりにくいことがある。複雑な機械の説明書についても同様である。

2. 自然さと文学性とは競合する。

今朝は7時に起きて、歯を磨き、顔を洗った。それから、朝食をとり・・・等々、あまりにも描写が自然であると、文学性がなくなってくる。また、文学性を追求していくと、風がにおい、花が笑い、星がほほえむ等々、不自然な表現が出てくる。

3. 自然さと興味深さとは競合する。

不自然だからこそ興味を引くということがあることは否めない。人間はあまりにも自然なものには興味を示さない。興味深さを追求していくと、不自然さを取り入れていかざるをえなくなる。

4. わかりやすさと芸術性とは競合する。

文学も、高級のものになればなるほど、難解になってくる。例えばロシア文学で高く評価されているものとして、プロークの「十二」という詩があるが、かなり難解である。わたしも、読んでみたが、よく理解できなかった。また、あまりにもわかりやすい文章には芸術性が感じられないことが多い。

また、一つの作品のレベルだけではなく、一つの文、語句、単語のレベルでも同様である。たとえば、「お洋服」というかわりに「お召し物」といえば、同程度の敬語だと思うが、子供や日本語を話す外国人はこのような文学的表現は理解できないかもしれない。

5. わかりやすさと興味深さは競合する。

私は理科系の学部にいたが、大学に入ると、数学や物理学の講義はかなり難しくなり、リアルタイムで理解することは不可能に近くなっていく。しかし、これらの科目をわかりやすく教えてくれた先生よりも、難しいままで教えてくれた先生のほうが良い思い出として残っている。人間は難解なものに興味を示すものであり、それだからこそ、教育という営みが成立するのではないだろうか。小説の中に出てく

る不可解な人物、不可解な話の展開、不可解な結末は、その小説をいっそう面白いものにする。また、興味深さを追求していくと、例えば日本経済の構造とか、素粒子の間に働く力とか、話が難しくなってくる。

(私自身、人前で話しをするときにはわかりやすく、また、文章を書くときにもわかりやすくということに心がけてきた。しかし最近、本当にこれでもいいのか、むしろ多少とも難しい要素をとり入れるべきではないかと思い始めている。)

6. 芸術性と興味深さとは競合する。

神曲という作品は、すぐれた文学であるにもかかわらず、あまり読まれない作品のようである。しかし必ずしも難解ではないと思う。いろいろな情景描写はそのまま味わえばよいし、また、この作品が人生行路をも描いているということは、すぐにわかることである。しかし、かなり読みにくいことは確かである。小説のようなストーリーがなく、また、同じような情景描写がえんえんと続く。そして、ギリシャ、ローマやイタリアの地名や人名がたくさん出てくる。長編詩というの、われわれにとってはあまりなじみのないものである。

(ただ、このようなことを書くと、反対の声も上がってくるかと思う。そのため、一つのことは確認しておきたい。すなわち、人間の興味やものの面白さというものは多面的なものであるということである。世の中にはマラソンやエベレスト登山を楽しむ人もいるし、1人の人間の内にもいろいろな関心が同居している。)

大文学作品を完成させるためには、ここまでしなければならなかったとでも表現すればよいであろうか。

また、興味本位で書かれたものは、芸術的水準の劣ったものになりやすい。このような作品は山とあるので、特に説明を要しないであろう。

(しかし、考えてみれば芸術性が高くなればなるほど難解になり、また面白くなるというのは厳しい事実である。非常にすぐれた作家、あるいは詩人が現れた場合、能力に見合う収入は期待できず、また、世の中から認められず、歴史の中に埋もれてしまうこともありうるということである。もし埋もれた作品の発掘をしている方があれば、ぜひがんばっていただきたい。)

以上のとおりであるが、これらは、翻訳に限らず、一般に文章を書く際に問題となることである。その

ため、文章読本、文章作法、文体論等で、適当な文献があるのではないかと、多少調べてみたが、今のところ見つからない。文章読本の類では、「わかりやすく」ということを主張するものは多いが、それ以外の項目はあまり扱われていないようである。

また、これらは、絵画、彫刻といった、造形芸術にもある程度共通する問題であると思う。例えば、あまりにも自然な絵画はあまり興味を引かないし、また、芸術的であるためにわかりにくくなるということもある。そこで、美学や芸術論でよい文献がないかと思うのであるが、今のところ見当たらない。

また、競合ということは、物作りにおいては必ず直面する問題である。例えば、車をつくるとなると、以下の3つの要求は競合する。

1. 安い。
2. 安全性が大である。
3. デザインがよい。

すなわち、例えば安全性を高めようとする、製造のコストも高くなっていく。しかし現在のところ、「物作り学」という学問は確立していないようである。

なお、翻訳の場合は、上記の4つ以外にも、原作に対する忠実性ということも要求されるであろう。また、経済性（仕事が速く進む、仕事に要する経費が少なくすむ）ということも要求されるであろう。しかしこれらについては今回は触れないことにする。

また、これら4項目の優先順位はどうか、文章の読みやすさはどこに入るのか等々、関連して取り上げることが可能な事項はたくさんある。要するに、このような議論はもっともっと肉付けが可能であり、また、そうすべきであると思うが、とりあえずここでは、当面必要な範囲の議論にとどめることにする。

さて、このような、いろいろな要求事項が競合するという現実を前にして、我々はどのような行動をとればよいのであろうか。あまりに高い理想を抱くことをやめ、現実に目を向け、妥協することを学ばべきであらうか。現実主義という姿勢も、ある程度は必要なのかもしれない。また、一つのをわき目もふらずに追求していくと、必ず犠牲が伴い、どこかでしわ寄せがあるということも理解しなければならないであろう。多くのものが互いに関係しあっている以上、絶えず周囲にも目を向けなければならない。すなわち、わき目をふらなければならぬということである。そして、改善できることは改善していきたい。また、特定のものに「悪」というレッ

テルを性急に貼ることのないよう、注意しなければならないであろう。美の反対は醜さか、あるいは芸術性の不在か、わたしにはわからないが、汚い字にも、しばしば、それなりの魅力があるものである。また、無味乾燥な文章の効用というものもあるに違いない。不自然さの面白みもあるし、難解であるがゆえの魅力もある。

バランス感覚、優勢順位といった考え方も、必要であることは言うまでもない。例えば中学生や高校生に作文を教える場合、「文章はわかりやすくても、わかりにくくてもよい」とか、「自然な文章、不自然な文章、どちらでもよい」といった教え方をすると、文章感覚がおかしくなってしまうであろう。言語というものがコミュニケーションの手段である限り、ほとんどの場合、難解さよりもわかりやすさ、不自然さよりも自然さが奨励されるのは当然であろう。

これらのことをふまえて、これ以後、翻訳に関する論争について見てみたいと思っている。

なお、ここで述べたことにつき、もっと違ったアプローチができるのではないかというご意見等、もしあれば、お聞きしたいと思っている。

お知らせ

拙著「東洋の翻訳論」、「続 東洋の翻訳論」、「東洋の翻訳論」は下記の書店で扱っております。（各冊とも税込み価格 735 円です。）

（株）朋友書店

〒606-8311 京都市左京区吉田神楽岡町 8 番地

TEL : 075-761-1285 FAX : 075-761-8150

メールアドレス hoyu@hoyubook.co.jp

なお、本の内容は以下にあるとおりです。

<http://www.honyaku-tsushin.net/ron/bn/toyo3.html>

筆者メールアドレス

a_kitamura07@yahoo.co.jp